



NO.416

R4年3月1日

発行

〒869-1217

熊本県菊池郡

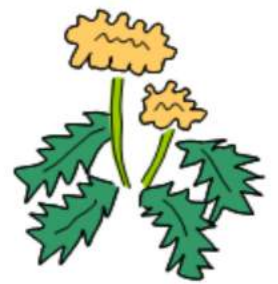
大津町森54-2

社会福祉法人

三気の会

三気の里

☎096-293-8100



「春を待つ」(1) (2)

施設長 木下昭二

これを書いて今、熊本県内は「新型コロナウイルス感染蔓延防止措置」が継続・延長され、新規感染者数の高止まりが続いている状況なので、あまり明るい話題もどうか…と思いつつも、今年度も続けて「新型コロナウイルス」に翻弄された一年だったので、「R4年度こそは…」との想いを乗せて書いてみたいと思います。

3月に入り随分と暖かく感じられる日が増えてきました。それに伴って少しずつ春の訪れを感じられるようになって、気の早いつくしが芽を出していたり、早咲きのさくらがまだかまだかと芽吹きの時を待っているのが観て取れ、視覚的にだけでなく嗅覚でも楽しさを感じられ、特にこの時期にワクワクとした気

持ちになるのは、私だけではないと思います。今まさに実家の梅の木は満開状態で、その香りがとても心を和ませ落ち着かせてくれます。と同時に、昔から気にかかっている「ある言葉」を思い起こすのも、この時期です。

そんな大袈裟に謎めいた言い方をするほどの事でもないのですが、それは「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」という故事ことわざの事です。意味をご存知の方は沢山おられると思いますが、不勉強な私はこれを機に調べてみました。すると、梅と桜は共にバラ科サクラ属の落葉広葉樹という同じ仲間である事が分かりました。しかし、その性質は異なっており、桜は枝を切ると花が咲かなくなるだけでなく、切り口から雑菌等が入り枯れてしまう事がある為、切る事は憚

られるというのが理由のようです。一方で梅は枝を切る事によって切り口から小枝が密生し枝ぶりが良くなって成長し、大きな実を付ける事に繋がるそうです。その考えから派生して、今では「同じ家系や兄弟」であってもそれぞれの特徴や性格が異なり、その「特徴や性格に合わせてお世話をしないとうまく育たない」という戒めのような意味合いで用いられています。この表現を目の当たりにし、まさに私達が支援者として利用者さんを見ていく上で「障がい特性」にばかり着目するのではなく、「一人ひとりの利用者さんの特性を受け入れつつ、本人が持つ強みの部分を伸ばしていく事が大切である」との教え、導きであると大変感慨深く思いました。

昨年、観に行きたいと思っていながら、コロナ禍の中で観に





3月



1班：「彩り」

今年度もいろいろなことがありましたが、利用者23名、スタッフ11名全員揃って、令和4年度という山を登りきることができそうです。振り返ると、やはり一番は新型コロナウイルスに振り回されたという印象はありますが、その中でも安定した日中活動を提供することができました。1班の特徴として、毎日の作業が安定していること、体力に自信のある利用者・スタッフが揃っていることが強みであり、1年間を通して作業、運動に取り組んでいます。しかし、反省すべき点や課題も多々あります。その中の一つとして、利用者スタッフ共に、心がワクワクするような、楽しい思い出となるような関わりや環境を必要としています。コロナウイルスが終息した後、発生前より皆さんの生活に少しでも多くの彩りを添えられるようスタッフ一人一人努めて参ります。

業務課長 本田 誠

2班：「チーム」

今年度、利用者の方との不意の接触での転倒や病気で2名の方が入院されることがありました。コロナ禍においての入院付き添いは制限があり、病院側の受け入れは以前のように容易ではありません。利用者の方の障害の特性や付き添いの必要性をDrや看護師に伝え、付き添いの打診をします。付き添いの許可が出ると、日中夜間と職員が付き添い、手術のこと、入院中の過ごし方を利用者の方に理解できるように伝え、Drや看護師とのやり取りの仲介をしながら入院生活を送り、退院に向けた準備をしていきます。そこには、職員間での連携とDrや看護師との連携が存在し、利用者の方を中心に現在も医療と支援者がチームとなり治療と予後の支援をしています。幸いお二人とも付き添いができ、手術と入院を落ち着いて受け入れられ、退院後も医療と連携しながら支援員がチームとなり付き添い少しずつ元の生活に戻っています。コロナ禍において改めて、チームの連携の大切さを実感しています。

支援課長 岩田 幸児

3班：「皆で力を合わせて」

今年度は「全員で作業を行う」という目標を掲げました。3班の利用者さんは毎日野菜の袋詰め作業を頑張られています。受注量が多い野菜は玉葱です。玉葱は他の野菜よりも工程が多く、①皮を剥く（剥き過ぎない）、②重さを測る、③袋に入れる（玉ねぎの向きを合わせる）、④袋の封を閉じる、⑤納品箱に入れるという工程で行っています。工程毎に得意な方が居ますので、役割分担を行いながら行ってきました。しかし数名の利用者さんに作業を提供することが難しかった為、③について受注業者に相談したところ、向きを気にせずに入れても良いとだけいただきました。野菜は毎日受注・納品を行っています。現在は作業を全員で行うことができ、作業中は終わりの見通しを持ちながら「頑張ろう」「あと少し」と声を掛け合いながら頑張っています。

支援員 友尻 陽也



4班：「想いをよせる」

1月末のこと、Aさんがおどける様な笑いと共に、「最近お父さんが枕元によく立つんですよ」と口にされました。Aさんのお父様は8年程前に他界されています。お父様は何か話されているのかとAさんに問うと、「A、元気にしてるか」と言われていたとのこと。他にも「お腹が空いている様で何か探している様だった」と、また、「何かくれ」と言われていたとのこと。話された後、オーバーに笑って見せられますので、私は「いつまでたっても、Aさんの事を想い、気にかけてくれているのでしょう。親はどんな形になっても親ですから」と話したのです。そして2月の初旬、起床後着替えを済ませてからブツブツ呟くAさんの姿がありました。「そろそろだもん」という言葉を何度も口にされ、「お参り」「線香」という言葉を聞き取ることが出来ました。2月10日はお父様の命日。そのことを1月末頃から気にかけており、お父様を偲ばれていたのだと気づきました。利用者の皆さんはそれぞれの形で両親、家族を想っておられます。写真や電話、はがき等々で家族を感じられるようしていきたいと思います。

主任支援員 石丸 直美



5班：「ハーバリウム体験」

先日のレクリエーションでは蔓延防止措置の中だった為、施設内で楽しめる企画をと思い、午前中はDVD鑑賞を行いました。スクリーンにスピーカーを使って大画面と大音量（配慮した音量）で臨場感を出し、ポップコーンと飲み物を準備することで少しでも映画館に近い雰囲気を出せるように工夫しました。お昼はテイクアウトの弁当を注文し、午後はハーバリウム体験を行いました。造花と瓶（スパイス入れ等）、ビーズやラメを買い揃えてそれぞれトレーに分け、好きな瓶や造花、ラメ等を自分で選んでピンセットで瓶に入れるという工程です。女性の利用者はもちろん、男性の利用者も液を入れて出来上がったものを見つめると嬉しそうな表情をしていました。活動内容はスタッフが企画しましたが、好きな瓶や花、ラメやビーズを選んで、好きなように飾り付けるといった自発的な活動参加を促し、素材に触れ、できたものを五感で楽しみ、リラックスするというスヌーズレンのような効果もあったのかもしれませんが。今回の企画を通し、スヌーズレンという理念に触れた為、利用者の自発的な動きや表現を引き出せるようにより学びを深めていきたいと思います。

主任支援員 佐藤 和也



相談支援事業所

「偏見と真のニーズ」

啓発課長 浦田裕之

私たち支援者には、本人、家族から知り得た情報を慎重に取り扱う義務（守秘義務）があります。インターネットから始まり、いくつかのやり取りを経て信頼関係が形成されます。そして、ようやく苦しみ、悲しみ、弱み、本音などを話されます。こまできて、ようやく真のニーズを聞くことができます。ところが、時に守秘義務を無視して本人、家族の許可なく情報が飛び交うことがあります。それも支援者の主観でケースを評価し、時にはその本人や家族を否定したりする偏った情報です。それを聞いた方は、どういう印象を持たれるでしょう？偏見を持つことは容易に想像できます。これまで長く相談業務を行ってきましたが、時にそういう場面に遭遇することがありました。本人、家族は、必死です。時には周りが見えなくなり、様々な形で表現されることもあります。でも、まずはその思いを傾聴し、受容し、共感しなくてはいい支援の

スタートができません。勝手な偏見を持つことなく、真のニーズを見つけれられるよう、そんな支援者でいられるよう邁進していきたいです。



危機管理委員会

「隣り合わせ」

副主任支援員 小城 崇

今年度の危機管理委員会では、食事中の事故防止を特に重要な課題として取り上げてきました。食事は利用者の皆さんにとっては、楽しみなことである一方、大きな刺激にもなり、危険と隣り合わせであることでもあります。特に年齢と共に嚥下機能が低下することは、病院の先生等の話でもあっており、命に直結する問題でもあります。食事中の詰り込みが起きると、私達だけの対応は難しく、医療機関での緊急対応が必要です。私達にできることは何かと考えた時

に、まずは基本となる一口量や食べるペースの調節を支援し、詰り込み事故を未然に防ぐことだと思えます。それでも事故が起きてしまうことも考えられるため、今年度は救急救命研修として日本赤十字社から講師の先生に来て頂き、緊急時の対応方法を学ぶといったことも行いました。利用者の方にとって楽しみなことであるからこそ、その隣にある危険性を再認識する一年だったと思います。



人材確保

「採用について」

部長 松本慎太郎

昨今の日本の人口減少により、子どもの数は少なくなり、比例して学生の数も減る中、福祉の不人気さから福祉を目指す学生も減ってきています。福祉系の学科に入学しても一般就職する人が増えており、福祉の業界は一人の学生をいくつもの事業所が取り合う状況となっています。景気が良いと福祉離れを引き起こし、人材不足に拍車をかけます。コロナ禍により、福祉は追い風になると言われましたが、現実にはより厳しくなっている気がします。人材不足は福祉だけの問題ではなく一般企業も同様です。高卒や外国人を積極的に採用せざるを得ない現状であり、三気の里も外国人を雇う日はそう遠くない未来だと思えます。人手不足では施設が成り立たなくなりません。人員の確保は、事業を継続するために必須なことであり、確保と同様に定着も含

めて考えなければならぬ経営の根幹といえる事案です。あの手この手で人材を確保し、働いてくれているスタッフが働いて良かったと思えるように、考え実践していきたいと思えます。

療育雑記

「個人攻撃の罠」

主任支援員 佐藤和也

利用者支援に悩み、同僚に紹介して頂いたのが「はじめの応用行動分析」という本でした。応用行動分析を御存じの方はわかると思いますが、自閉症のある方に対する専門的な療育法というわけではなく、人の行動を行動科学という学問を通し、行動問題を解決していくというものであって、対象となる人は自分も含めた人全般と言えます。さらに行動科学は経営やスポーツマネジメント等、幅広い分野で展開されており、一般的に自閉症の方の支援においても効果が確認されています。

この本を読んだ感想は「普段やっていることが理論的に書いてある」と思ったのを覚えて

います。もちろん勉強不足だった為、理論的に支援を展開しておらず評価のタイミングが適切でなかったり、専門的な支援とは程遠いものではありました。この本（応用行動分析）を学び一番良かったと思うことは「個人攻撃の罠」に陥らないような行動の捉え方、その人の見方を学んだことです。「個人攻撃の罠」はできないことをその人個人の性格や性質のせいにしてしまうことです。例えば「禁煙できないのは意思が弱いから」や「待てないのはわがままだから」、「できないのは才能がないから」等です。しかし、行動分析学ではできない理由を①やり方が（具体的に）わからない②間違っ

て学習していると捉えています。そのように利用者さんの行動を見るようになったことで、「わがまま」や「意思が弱い」、「自分勝手」という捉え方ではなく、「やり方がわからないんだな、それならばどうしたらわかるかな」や「どう工夫したらできるかな」と考えることができるようになりました。

それともう一つはアンガーマネジメントやセルフコントロールといった私自身の感情コントロールに結び付いたのは大変良かったと思えました。

近年では自閉症のある方の独特な行動は脳のさまざまな機能の問題であることがわかってきており、行動分析学や脳科学、その他にも行動を分析するツールが多々あるおかげで幅広い視点で利用者さんを見ることができきます。それでもわからないことや、うまく支援に結び付かないことも多く、常に学び、学んだものを支援に反映させていく必要があります。

この仕事に就いて長くなりましたが、学んだ物事は全て自分にも反映されます。私は聖人君子でもない未熟な生身の人間であることには変わりません。学んだものごととは人として未熟な自分に気付き、自分自身の問題解決にも繋がります。人として成熟し、利用者の身近な存在である支援者として少しでも心地よい存在になれるように心がけていきたいと思えます。

3月スケジュール

4日(金) アンパ創作活動
 9日(水) 避難訓練(里・GH)
 11日(金) 嘱託医来診
 12日(土) イベント食
 16日(水) 誕生会
 18日(金) ダイナミックリズム、
 アンパの日、BeTREE勉強会

25日(金) 退任式
 26日(土) スタッフ研修

毎週木曜日 ローソン移動販売
 BeTREE
 <営業時間>8:00~18:00

詳しくはインスタで



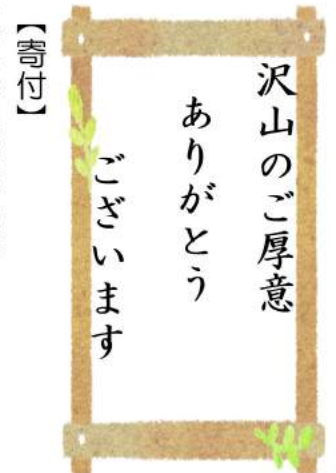
betree314

GH運営

「グループホーム運営委員会」
 事業課長 平川聖子

令和3年度もそろそろ終わりに近づいています。この1年も利用者の皆さんは、帰宅や外出ができない辛さに耐えながら生活してこられました。グループホームでは少しでも生活に楽しみを持てるよう、かき氷会や抽選会など独自の行事を企画したり、月に1度は弁当の日を設けたり、毎日の運動プログラムや個別の余暇課題に取り組んだりしてきました。それでも満足と言って頂ける支援が出来ていたかと思われるとまだまだ不足しているのではないかと思っています。2年以上もコロナ対策を続けて来て、ついつい「コロナだから〇できない」と口にしがちですが、グループホーム運営委員会では「コロナ禍を支援不足の言い訳にしない。今できること、先を見てできることを具体的に支援する」ことを申し合わせま

した。利用者さんからも「アパートで暮らしたい」「違う仕事もやってみたい」「着付けを習いたい」といった要望が上がってきていて、足踏みしてはられません。支援スタッフだけでなく、バックアップ担当者、相談員、看護師、沢山の委員で協力しながら、ニーズに答えられる支援をしたいと思います。



沢山のご厚意

ありがとうございます

ございます

【寄付】

三気の里家族会様
 山口亮爾様 田中満子様

【物品】

三島圭子様 赤星央子様
 小牧博則様 田口康博様
 柴田博子様 松枝由香様
 中村秀隆様 田中満子様
 森川琇介様
 三気の里家族会様
 知的障がい者施設協会様

【後援会ありがとうございます】

田中基幹様 金森保様
 森裕三様

